

目指す学校像	明るい学校 学びのある学校 きれいな学校 楽しい学校
--------	----------------------------

重点目標	1 不易と流行のバランスを考え、教育指導の一層の水準向上を図る。(学力向上) 2 安全・安心な環境を整備し、希望をはぐくむ教育を推進する。(安心・安全) 3 家庭・地域等との連携を図り、相互理解と信頼のもとに学校教育を推進する。(開かれた学校) 4 一人ひとりの教師力を高めるとともに、機動力のある組織をつくる。(教職員の資質向上)
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達	A	ほぼ達成 (8割以上)
成	B	概ね達成 (6割以上)
度	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学 校 自 己 評 価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	(現状) ○令和3年度全国学力・学習状況調査では市の平均に及ばない。 ○全国学力・学習状況調査の児童質問紙において「国語の勉強は好きですか」の項目で肯定的回答50%、「算数の勉強は好きですか」の項目で肯定的回答46.9%である。また、市学習状況調査においても同様の質問で、肯定的回答は学年が上がるにつれ、減少傾向にある。 (課題) ○基礎・基本の定着や家庭学習の習慣化が十分に図られていない。また、学習に必要な用具等もそろわないことが多く、家庭との連携が大いに必要である。 ○国語・算数の学習に対する意欲が低いため、理解度も低い。分かる授業を通して、達成感を十分に味わわせ、学習意欲を向上させることが課題である。	「わかる喜び・できる喜び」をはぐくむためのICTを活用した授業の充実	①オクリンクやムープノートなどのコンテンツを積極的に扱い、児童自らが主体的に行う授業実践を充実させる。 ②自分の考えや意見を他者に認めてもらったり、他者の考えをもとに理解を深めたりするために、コンテンツ内の共有化する機能を活用する。	①オクリンクやムープノートなどのコンテンツを活用した授業実践を月2回以上行うことができたか。 ②ICTを活用し、コンテンツを有効活用することで児童の理解力を深め、学校評価該当項目(児童用)で80%以上となったか。	①オクリンクやムープノートなどのコンテンツは常に実践することができ、共同編集など新たなコンテンツを使用した授業実践も日常的に行うことができた。 ②様々なコンテンツを活用した結果、児童一人ひとりが容易に意見や考えを発信することができ、理解を深められた。学校評価該当項目(児童用)でも91.2%と非常に高い数値を得られた。	A	①日常的に様々なコンテンツの活用ができたが、教員間の差はまだ少なからずあるため、事例研修などをさらに積み重ねる必要がある。 ②学校評価該当項目(児童用)では非常に高い数値を得られたが、学力の向上につながったとは言えない。ICTに関するアンケートとワークテスト等の結果を定期的に分析し、その結果をもとに新たな取組を考え、理解力の深まりにつなげていく。	学校運営協議会からの意見・要望・評価等 ICTを活用した授業が随所に見られ、様々なコンテンツを利用しながら基礎学力の向上につなげていた。しかし、現段階では全国学力・学習状況調査の結果につながってはいない。ICTの活用が学力に結び付くかどうか今後の課題である。ICTの活用が進む一方、中学校での定期考査や入学試験などでは、テスト用紙を活用した試験等が実施されているため、書く力の必要性を大いに感じる。ICTの活用や機能に頼り過ぎた結果、書く力の低下が懸念されるため、ICTを活用しながらも最低限必要な基礎・基本は身に付けられるようバランスよく取り組んでほしい。
2	(現状) ○令和3年度のいじめ認知件数は4件であり、長期欠席児童(コロナ感染症等を除く)は0である。 ○食物アレルギーで救急搬送が1件あった。 ○今年度開校46年目を迎え、校舎内外の施設・設備の老朽化(故障・修繕必要箇所の増加)が進んでいる。 (課題) ○いじめ件数0が理想だが、高学年時に重大ないじめ事案に発展しないよう、低学年段階から積極的ないじめ認知を行うとともに、組織的に早期発見、早期対応を行うことが重要である。 ○校舎内外において児童が怪我をする恐れがある修繕箇所(教室等のPタイル)が多数あるにもかかわらず、修繕が進んでいないことが課題である。	安全・安心な教育環境の整備	①危機管理対応マニュアルをもとに、実践的な訓練や研修(傷病者対応訓練や食物アレルギー対応研修など)を重ね、危機管理意識を高めるとともに危機対応能力を向上させる。 ②毎日の校舎、校庭、学校周囲の巡視・点検(月1回の安全点検を含む)により、安全・安心な環境づくりを行う。	①組織的に円滑かつ確実に対応するための、各種マニュアルの修正及び補足資料を作成することができたか。 ②修繕箇所の発見から対策までを3日以内に実施し、常に施設・設備が安全な状態が保たれているか。	①危機管理マニュアルをもとにした訓練や研修を定期的に行うことができた。登下校時の児童の安全確保の際は、危機管理マニュアルを参照し、適切に教職員の配置を行うことができた。新たに水害時の避難確保計画を作成し、マニュアルに追加して全教職員に周知した。 ②安全点検を確実に実施し、修繕箇所がある場合は、3日以内に修繕することができた。安全主任→用務員→管理職という報告ルートが確立されているため、漏れなく修繕し、児童の安全を確保できた。	A	①危機管理マニュアルを用いた研修計画をより充実させ、教職員一人ひとりが内容を把握すると同時にマニュアルの必要性を強く感じるよう研修内容や活用方法を工夫する必要がある。 ②学校施設や設備が老朽化しているため修繕だけでは児童の安全が確保できない箇所も多く見受けられているので、引き続き確実な安全点検の実施及び学校施設課等との連携を密に行う。	児童の安心・安全を脅かす事件、事故が多く起きている状況において、学校においても安全・安心な教育環境の整備は重要である。また、具体物を用いて児童に危険性を知らせることも大事である。教職員だけで安心・安全な環境を作りあげるのではなく、児童に「安心・安全は自分たちで守っていく」という意識をもたせることが大切であり、安全教育の一環として取り組んでほしい。希望をはぐくむ教育の推進のため、教職員の研修を充実させていることは大変よい。引き続き、子どもたちのために取り組んでほしい。
3	(現状) ○昨年度から学校運営協議会を立ち上げ、年間3回実施し、学校が抱える課題を2つ取り上げ、熟議を進め、今年度以降の方向性を見出すことができた。 (課題) ○限られた実施回数の中で、課題克服に向けた具体策の検討、実施、家庭・地域への周知、さらにはフィードバックを計画的に行うことが課題である。	「笑顔であいさつ」を進んで行える明るい学校づくり	①共通理解・行動のための教育相談に係る研修を実施し、校内支援体制の強化等、教育相談体制を充実させる。 ②管理職による服務に関する研修やスクールロイヤー等を招聘しての研修を積極的に行い、教職員のリスクマネジメント・クライシスマネジメントの意識を高める。	①学校評価該当項目で、児童・保護者とも肯定的回答90%以上となったか。 ②スクールロイヤー等の外部講師を招聘した研修を1回以上行い、教職員の危機管理意識を高め、学校評価該当項目(教職員用)で肯定的回答90%以上となったか。	①学校運営協議会で「あいさつ」を課題に掲げ、例年行っているあいさつ運動の期間には、中学生だけでなく、近隣の高等学校の生徒やPTAとも連携したあいさつ運動を実施した。学校評価該当項目で88.3%であった。 ②全校児童が進んであいさつに取り組めるよう児童会活動内で主体的な話し合いが行われ、議論された内容(あいさつビンゴ等)を行いながら活動ができた。学校評価該当項目で93.2%であった。	A	①高等学校とは引き続き連携して取り組める体制を構築していく。保護者や地域と結びついた取組に不十分さを感じるので、学校運営協議会として具体策を検討・実施していく。 ②各学級でも取組についての話し合いを充実させ、その集約機関として児童会が機能し、具体的な活動につながるような体制をつくる。また、様々な取組への協力を児童から家庭、地域へと発信できるようにしていく。	あいさつはとでもよくできるようになってきた実感がある。小中連携だけでなく、高等学校やPTAとも連携した取組の成果が現れたのではないかと感じる。引き続き、学校、家庭、地域で連携して取り組んでほしい。地域の人材活用についても高等学校や元氣塾(学校併設の福祉施設)等と連携し、充実した活動ができたと感じる。地域人材の発掘については学校運営協議会としても協力していきたい。
4	(現状) ○学校課題研修を通して、タブレット端末を効果的に活用した授業について職員間で共有した。 ○日課の変更や会議等を削減することで、教材研究を行う時間を十分に確保し、資質向上を図った。 (課題) ○ICTの活用能力に差がある。学校全体としてICTを活用した授業内容の質を向上させることが課題である。	一人ひとりの教師力を高めるとともに、わかる・できる喜びを味わわせ、児童の自己肯定感を高める教育活動の実践	①ベテラン・若手教員が学び合い切磋琢磨する体制を構築し、研修主任やエバンジェリスト等を中心とした指導方法研修会を月1回以上実施する。 ②教育への強い情熱をもち、子どものよさや可能性を伸ばすため、特別活動や人間関係プログラムなどで実践できる授業内容について教員研修を行い、自己肯定感を高める教育活動を各学級で学期1回以上実践する。	①全教員が、「わかる授業・楽しい授業」の実現を目指し、日常的にICTを活用する状況になったか。 ②特別活動を中心に、各学級で子どもの自己肯定感を高めるための手立てをすべての教育活動において実践することができたか。	①学校課題研修の取組としてペア研修を実施し、学級担任だけでなく少人数指導担当者もICTを活用した授業実践を行い、スキルアップを図れた。日常的に様々な実践を行うことで児童の興味・関心を高めることができた。 ②教育相談主任を中心に研修会を実施した。各学級ですぐに実践できる事例や活動案を紹介してもらい、特別活動や人間関係プログラムで実践したことで、自己肯定感を高める手立てを講じることができた。	B	①教員間でICTを活用するスキルに差がみられるため、実践例や活用方法を学ぶ研修を充実させる必要がある。学校課題研修の年間計画に明確に組み込み、よりスキルアップを目指す。 ②自己肯定感の高まりをアンケート等の結果を活用し、数値の変化から見とることが十分にできなかった。数値の変化を参考にするとともに、引き続き長期休業日等の研修日を活用し、教育相談主任を中心に研修を行ったり、他の学級での実践を参観する機会を設けたりする。	ペア研修等の実践はとでも素晴らしい。ICTの活用スキルに教員間の差が見られるとのことなので、今後もスキルアップのための研修は継続してほしい。日常的な教育活動の実践は、学校運営協議会委員には伝わりにくいので、学校公開日等は評価項目に即した内容で授業実践をし、参観できると学校の現状をより知ることができると感じる。

